永遠の依存

ふぐるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠の依存

【Ｎコード】
Ｎ３０６１Ｊ

【作者名】
ふぐるま

【あらすじ】
竹林の中で不死人は殺し合う。何を思って二人は殺し合いの日常を続けるのか。

（前書き）

百合要素は薄いです。

竹林。竹の葉の隙間から見える満月。
ポケットに手を入れたまま藤原妹紅は人を待つ。
吐く息が白い。雪こそ積もっていないが冬の寒さは不死の身にも辛い。
ポケットから抜いた手に息を吹きかける。
待ち合わせの時間にはまだ早い。
満月が頭の真上に来た時、彼女は現れた。
山歩きには不向きな長いスカート。
艶やかな黒髪が月光を受けて光る。
「お待たせ。妹紅」
蓬莱山輝夜はそういうと小首を傾げて微笑んだ。
愛おしくて堪らない恋人へ向けるような晴れやかな笑顔だ。
「かぐやあああっ！」
土を蹴り妹紅が輝夜に駆け寄る。
炎に包まれた右手が空を切る。
首を狙った一撃を紙一重で回避した輝夜はそのまま空へと舞い上がる。
「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」
輝夜の指先から放たれた輝く五色の竜が妹紅へと突き進む。
「虚人『ウー』」
妹紅が右手を振りかざすと背後に巨大な不死鳥が現れる。
竹林が紅蓮に染まった。
振り降ろされるれる右腕。
妹紅の動きに合わして不死鳥が鉤爪を振り抜く。
爪に捕らわれた五色の竜は引き裂かれ霧散した。
そのまま不死鳥は火の粉を撒き散らしながら輝夜へと飛んでいく。
「神宝『サラマンダーシールド』」

不死鳥の行く手を炎の壁が遮る。
炎と炎の衝突。
爆風が竹林をなぎ払う。
吹き荒れる砂埃と舞い散る竹の葉。
輝夜は思わず眼を瞑る。
慌てて薄目を開け見下ろすが、地上に居るはずの妹紅の姿が無い。
右頬への衝撃。
揺れる視界。
視界の端に炎の翼を生やした妹紅の姿を捕らえる。
そのまま地面へと急降下。
景色が高速で流れていく。
向かってくる妹紅。
落ちながらうっすらと微笑み輝夜が呟く。
「……神宝『ライフスプリングインフィニティ』」
追撃を狙う妹紅の目の前に、突然輝く光の玉が現れる。
「まずっ……」
慌てて舞い上がろうとするが間に合わない。
光の玉から網目状にレーザーが奔る。
眼も眩むような燕の巣に巻き込まれ落下する妹紅。
地響きを立てて墜落。
少し間を空けてもう一人墜落。
竹林にまた静寂が戻った。

輝夜との殺し合いはもう習慣になっている。
満月の夜は必ずここに来て殺し合う。
その度にどちらかが死ぬ、あるいはどちらも死に、生き返る。
どこまでも不毛な争いなのは分かっている。
死ぬのは痛い。苦しい。辛い。

だけど私はこの『習慣』を改めるつもりは無い。

私が不死になった当初はとても誇らしかった。
私は死なない。
死なないという事は未来が無限に有るということだ。
未来が無限ならチャンスだって無限だ。
無限のチャンスが有るならば出来ない事はない。
「出来ない事はない」その間違いに気が付いたのは最初の百年が過ぎた頃だった。
親、兄弟、親戚、近所の人間。家、畑、本、服。
いつの間にか全て無くなっていた。
そして理解した。
私が何を創り何をしようと百年経てば全て消えてしまう。
永遠の未来を持つ私から見れば「何かを遺す」という事は不可能なのだ。
命に限りの有る人間ならば死後の事は分からない。
生きている間、せいぜい八十年残る物があれば、未来永劫それが遺ると信じて逝ける。
私にはそれができない。
永劫まで残るのはこの身だけ。
……いや、それすらも分からない。
誰も私の事を覚えていない。
私を知る者は全て死んだ。
私の存在は誰にも知られない。
私の存在を証明する者は居ない。
例え今居たとしても百年後は、二百年後は。千年先は？
永遠に滅びない体のせいで自分の存在すら疑わしくなる。
人間も妖怪も神様すらも居なくなった世界に時間は存在するのか。
そんな話を慧音から聞いたのは大分後の事だ。

全てが消え去った後、私はどうなるのか。
私はこの恐怖に耐えることが出来なかった。
竹林の奥深くで暮らしていた筈だがその頃の事はよく覚えていない。
そんな時に出会ったのが輝夜だ。
最初は誰だか分からなかった。
竹林で一人、不安と恐怖に脅かされ正気を失っていた私は輝夜に襲いかかった。
おそらく何も考えずに焼き払ったのだろう。
家ごと燃やした灰の中から蘇った輝夜を見て正気に戻った。
父の敵。
これが最初の殺し合いだ。
殺し殺されまた殺し。
何度目かの蘇生で目を覚ました時。輝夜は居なくなっていた。
そして私は気が付いた。
輝夜はいくら殺しても死なない。
私の持つありったけの憎しみを彼女にぶつける事で私の存在は証明される。
「父の敵を討つ」という出来事は永遠に残り続ける。
何故なら輝夜は永遠に蘇るからだ。
父の敵を討ち続ける事で私の存在は保証される。
輝夜のおかげで私は、不死の恐怖を知ってから三百と二十四年ぶりの安らぎを得ることができた。

夥しい量の血を流しながら妹紅が立ち上がる。
落下の衝撃で折れた左足を引き摺りながら輝夜へと向かう。
もう火の鳥を出す体力はない。

血まみれの妹紅がこちらへやってくる。
足を引き摺りながら。月光に照らされて。
満身創痍といった様子だが眼は死んでいない。
憎しみを込めた眼で私を見つめてこちらへやって来る。
私の体はもう動かない。
どこが痛いのか分からないほど傷を負っている。
今度永林に受身の取り方を教えてもらおう。
これから妹紅が私に止めを刺すのだと思うと笑みがこぼれる。
そういえば初めて殺し合った時も笑ってしまったな。

罪人として地上に落とされ、永林が来て、いなばが来て。
私の周りは死なない奴ばっかりだ。
だからといって寂しくないわけではなかった。
むしろ孤独は誰よりも長く体験したつもりだ。
永林は私に良くしてくれる。
遊び相手にも話し相手にもなってくれるし、命を懸けて私を守ってくれる。死なないけどね。
だけどそれは私を見てくれているわけじゃない。
罪悪感。
そう、私を罪人にした罪の意識からそんな行動をとっているのだ。
つまるところは自己満足。
偽りの主従関係。
私じゃなくても良いのだ。
自分の罪を償ってしまえば何処かへ行ってしまうのではないか。
そんな寂しさが常にあった。
思えば私の周りは偽物ばっかりだった。
地上で私を育てた偽の親。
偽物の宝を持って求婚に来た馬鹿達。

偽りの愛情を注いでくれる従者達。
だけど、妹紅だけは違う。
彼女の憎しみは本物だ。
初めて出会った竹林で、妹紅の炎に包まれて、心から笑う事ができた。
私を本気で憎んで本気で殺してくれる。
偽りの中にある唯一の本物。
ちゃんと私を見てくれている人が居る。それも永遠に！
永遠に私を見て、本物の憎悪をぶつけて私を安心させてくれる。
だから私は妹紅に怨まれよう。憎まれよう。
刺客を放とう。殺してやろう。
すればするほど妹紅は私を見てくれる。思ってくれる。

妹紅が輝夜の首を掴み引き起こす。
憎悪の炎を燃やしながら冷ややかに輝夜を見下ろす。
「死ね」
妹紅が囁き手に力を込める。
何百回目かの敵討ち。
「ねえ……妹紅？」
輝夜がかすれた声を出す。
「私のこと嫌い？」
「……」
「私はね……」
「……」
不意に輝夜が顔を近づけた。
避ける間も無く唇が重なる。
冷たい風が吹く。

竹がぶつかりカラカラと音を立てる。
月だけが二人を照らす。
妹紅が輝夜を投げ捨てる。
投げ捨てた妹紅の胸を色とりどりの実のついた木の枝が貫いている。
「妹紅？私を殺してくれる？」
仰向けで地面に倒れたままの輝夜が尋ねる。
「……何万回だって殺してやるよ」
吐き捨てるように言い胸に刺さった枝を乱暴に引き抜く。
そのまま輝夜に歩み寄り上から覆いかぶさるように崩れ落ちる。
倒れた妹紅が燃え上がる。
二人は炎に包まれた。

「次の満月は……」

炎の中で、どちらが何を言おうとしたのか。
知る者はいない。

（後書き）

いつまでも感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3061j/

永遠の依存

2010年11月12日21時46分発行